特殊詐欺は「他人事」ではない

安全なまちづくりその１

7 月 11 日に実施された「スクールガード研修会」に参加して、特殊詐欺の巧妙さ・多種多様な手口にただただびっくりするばかり。**その始まりは、詐欺被害者の大半が固定電話への電話から始まるそうです。**特殊詐欺の犯人は、親族や警察官、銀行員等を装い「キャッシュカードが使えなくなった」「あなたの口座から現金が引き出されている」「還付金がある」「サイト料金が未納です。支払いがないと裁判になる」と電話をかけ、キャッシュカードやお金をだまし取ろうとしいう手口。これらすべて詐欺で、警察官や銀行員がそのような要求をすることは絶対にありません。電話で還付金や示談金を要求したり、キャッシュカードの話をすることはありません。まして、キャッシュカードを受け取ったり、新しいものと交換したり、暗証番号を聞くことも絶対にありません。

しかしながら、特殊詐欺グループは狡猾・巧妙で「驚かせ」「急がせ」「不安がらせ」、いろんな心理的な仕掛けを仕組んで被害者をだまします。自分は引っかからない、大丈夫だと思っていても、電話に出てしまえば、だまされることになってしまうのだそうです。

ところで、特殊詐欺の魔の手が私たちの近くまで忍び寄っております。そんな中、「**電話機を留守番設定にする**」「**詐欺電話撃退装置を取り付ける**」「**局番 050 には注意をする**」ことが有効な対策であると言われています。その対策がなぜ有効であるのか、その道のエキスパートに伺ってきました。それを皆さんに紹介します。

なぜ、留守番電話に設定しておくとよいのか

- 電話に出ると犯人の話に聞き入り、冷静さを失い、相手のペースに乗せられてしまう。留守電にすればその心配はない。
- 犯人は自分の声が録音され、証拠が残ることをいやがるので、留守番電話にセットしておけば犯人は電源をすぐに切る。
- 犯人は狙いをつけた相手には、何度も電話をかけてくる。留守電にすればその心配はない。

なぜ、詐欺電話撃退装置を取り付けるとよいのか

振込め詐欺見張隊 新 117

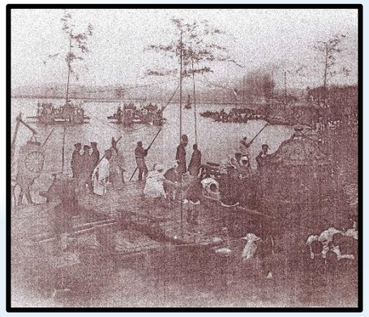
詐欺電話撃退装置とは、固定電話に外部接続し、電話の相手に「この電話は振り込め詐欺などの犯罪被害防止のため、会話が自動録音されます」などの警告メッセージを流す機器や通話内容を自動的に録音ができる機器のことです。所有している電話に取り付けるだけの装置で 1 万円程度。同様の機種が内蔵されている電話機で安価なものなら、5000 円程度である。

- 装置を設置している世帯で振り込め詐欺の被害は確認されていない。
- 不審電話や迷惑電話は減少する。
- たとえ、被害にあっても犯人の証拠が残る。

なぜ、局番 050 に注意をしなければならないのか

- 「050」で始まる電話は、ネット回線を使ったアプリ電話であり、契約時に法的な本人確認が義務づけておらず、特殊詐欺グループが身元を隠すために使用しているケースが多い。また、偽造カードを使用して契約している事例も多くある。

山王祭（船渡御：下阪本が担う）



〈戦前の船渡御の様子〉

日吉大社山王祭は、湖国三大祭り一つで五穀豊穣と地域の繁栄を願って最古より執り行われています。天智天皇が大津京遷都(667 年)のとき、大和国三輪山に座す三輪明神が坂本の地に勧請(かんじょう)されたことにより、この地で今まで信仰されていた大山咋神(おおやまさくのかみ)とともに二柱の祭神が祀られるようになりました。すなわち、三輪明神が大宮(西本宮)、大山咋神が二宮(東本宮)に祀られるようになったのであります。唐崎神幸の記録（慈恵大僧正拾遺伝）には、桓武天皇の勅願(ちょくがん)によって延暦 2 年（791)に三輪明神と大山咋神が祀られている神輿二基が新造されたと伝えています。11 世紀初頭に、聖真子(しょうしんじ：宇佐宮)・八王子(牛尾宮)・客人(まろうど：白山宮)、1109 年に十禅師(樹下宮)、1115 年に三宮の各神輿が造られました。いわゆる山王七社が出そろったのであります。ちなみに、西本宮に属するのは西本宮・宇佐宮・白山宮で、東本宮に属するのは東本宮・牛尾宮・樹下宮・三宮であります。

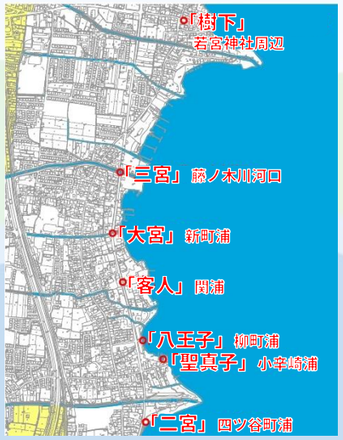
ところで、鎌倉末期の『耀天記(ようてんき)』には、「午の日二宮拝殿に、八王子・三宮渡行」、「未の日、宿院(宵宮場のこと)に四基の神輿渡行」等、記されています。この頃より、現在と同じ祭礼が行われていたと思われます。時代が下がり、延文元年(1356)9 月 7 日に行われた日吉祭について、「この日洪水。唐崎浸水して陸地見えず。そのため、船で神幸する」と、祝部行丸(はふりべゆきまる)が『秘密記』にて記しています。これ以降、陸上を行く神幸から船を用いた船渡御が主流になったそうです。

しかしながら、元亀二年(1571)、織田信長の延暦寺焼き打ちで、日吉大社は灰燼(かいじん)に帰したため、天正十二年(1584)には大榊(おおさかき)のみが唐崎神社へ渡御(とぎよ)するような状態だったそうです。天正十七年(1589)、大津城主新庄直頼が、大宮・二宮・聖真子の神輿を寄進し、焼き打ち後、最初の唐崎渡御が行われたそうです。その後、四社の神輿が新造され、七社の神輿が復活いたしました。これが現在重要文化財に指定されているものです。

現存する樹下宮の船小屋

翻って、貞享五年(1688)に記されている『日吉山王祭禮新記』には、「4 月 2 回目の申(さる)の日　巳の刻　**下坂本町々の濱において、七社神輿の船を搦(から)める。**所謂船二艘を寄せ合わせ、船梁をその上に打ち渡し、四方に精進竹(しめ縄用の竹)を四本たて、注連縄(しめなわ)を曳き、高札各々(おのおの)に神号を書す。之を立てるのは七社之同じ(同じように立てる)。七本柳の濱に御船を寄せ置くなり。**御船を搦めるのは下阪本町々の役なり。大宮は酒井町、二宮は四ツ谷町、聖真子は石川町、八王子は柳町、客人は大道町、十禅師は比叡辻、三宮は太間町**」と。

江戸時代には、上記の記述のように、二艘の丸子船に板を渡して神輿一基を載せていました。七基の神輿を載せるためには十四艘の船が必要で、それらの船を準備することが下阪本の役割でありました。各船に敷く板や櫓(ろ)などの船道具は、七浦の船小屋に分散して保管されていました。**今でも比叡辻の若宮神社裏には、樹下宮の船小屋が現存しています。**なお、この原稿作成にあたっては、日吉大社須原禰宜からご教示をいただきました。



船小屋があった七浦の位置

下阪本駕輿丁からのお願い

下阪本駕輿丁は、湖国三大祭の日吉大社山王祭を実行する駕輿丁(神輿を担ぐ集団)の一つです。下阪本を中心に約 80 名で構成されています。その活動は山王祭だけでなく、地域行事にも積極的に参加・協力しています。

神輿を担ぐときは無心です。そして、観客の熱い視線に心が高揚します。強い使命感を感じ、日常生活では体験できない感激・感動を味わえます。また、年齢や仕事が異なる人との交流は、教養を深めて人間力を高めます。

山王祭や駕輿丁を深く知りたい、参加したいと思う人は以下のメンバーに連絡ください。

谷口　誠(090-3894-5518)　・　美濃邊哲郎(090-5468-7385)　・　石本洋治(090-5886-4057)